

# わが国の里孫活動と米国のフォスター・グランドペアレント・プログラムとの比較

永 嶋 昌 樹

## A Comparative Study of the Satomago Activity in Japan and the Foster Grandparent Program in the United States

Masaki Nagashima

**Abstract:** The Satomago Activity is a type of intergenerational program in which elderly and child have continuous interpersonal interaction on a one-to-one basis. This type of activity has already been done in Japan in 1969.

A similar program in the United States is the Foster Grandparent Program (FGP). Since 1965, the US federal government has conducted the FGP as a volunteer program.

This study compared the backgrounds of these programs, the characteristics of their activities, and their activities' contents to ascertain their differences and similarities.

The Satomago Activity and FGP are intended to decrease individual or social problems through increased interaction between members of different generations. The fact that these relationships between elders and children are fictional kinships is interesting.

**Key Words:** intergenerational relationships , fictive kinship, paid volunteer work

**要旨：**里孫活動とは、高齢者と孫世代の子どもとが個別的で継続的な交流を行う、世代間交流活動の一種である。わが国の里孫活動は、1969 年には既に行われていた。

これに類似する取り組みとして、米国におけるフォスター・グランドペアレント・プログラム（以下、FGP）がある。こちらは、1965 年から現在に至るまで、国家によるボランティアプログラムとして実施されている。

本稿では、これらが開始された経緯、活動の性質、実際の活動内容等を比較し、両者の相違点と類似点とを検討した。

里孫活動と FGP は、どちらも、異世代の者同士が交流することで、何らかの個人的あるいは社会的な課題の解決を志向している。また、高齢者と子どもとの関係が、架空の親族関係であることも興味深いといえる。

**キーワード：**世代間交流、擬制的親族関係、有償ボランティア

## I 研究の背景

### 1 人口動態と世帯構成

総務省統計局の人口推計によると、2016（平成 28）年 10 月 1 日現在で、総人口に占める 65 歳以上人口の割合（高齢化率）は 27.3%であった。2042 年以降は高齢者人口が減少に転じるが、65 歳到達者数が出生数を上回ることから高齢化率はさらに上昇を続け、2060 年には 39.9%に達して、国民の約 2.5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となると推計されている。

また、厚生労働省の『平成 28 年 国民生活基礎調査の概況』によれば、全世帯数に占める三世帯世帯の割合は 2016（平成 28）年 6 月 2 日の時点で 5.9%であった。これを 1986（昭和 61）年の 15.3%と比較すると、減少傾向は極めて顕著である。このように、高齢者の割合は増え続けるが、それとは反対に高齢者と孫とが同居している世帯は減少の一途をたどっている。それに伴い、高齢者が孫世代の子どもと触れ合う機会が減少していると考えられる。

さらに、内閣府『平成 27 年度 第 8 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果（全文）』を見ると、「子供や孫とのつきあい方」として、「子供や孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」と回答した者の割合は、米国 9.0%、ドイツ 14.2%、スウェーデン 3.7%、日本 27.1%であった。日本の数値は、他の 3 国と比較するとかなり高いことがわかる。ところが、「別居している子供との接触頻度」では、「ほとんど毎日」「週に 1 回以上」を合わせると、米国 78.6%、ドイツ 62.5%、スウェーデン 78.1%、日本 51.2%であり、4 か国の中では最も低い。単身世帯の割合は、米国 38.0%、ドイツ 40.6%、スウェーデン 47.9%、日本 15.5%であった。高齢者と子どもとの交流が他国よりも少ないとは一概に結論づけることはできないが、日本では、高齢者が孫と別居した場合には孫と接触する頻度が少なくなる可能性が高い。

### 2 行政機関による世代間交流活動の位置付け

そのような状況の中、各行政機関により世代間交流の必要性が提示されてきた。

たとえば、建設省による 1994（平成 6）年の『健康で心豊かに生きるための住宅・社会資本整備をめざして－生活福祉空間づくり大綱－』（以下、大綱）では、「地域及び家庭での生活時間が今後益々増加する中にあって、その生活をより豊かで有意義なものとするためには、近隣社会であるコミュニティーを充実する必要がある。特に、高齢者がそれまで培ってきた知識、経験などをコミュニティー活動の中で活かし、地域活動を通じた地域の相談役としての役割や子供達との交流を通じた文化の伝承者としての役割を果たすことが期待される」と、高齢者が異世代と交流することの必要性が明記されている。

また、1997（平成 9）年 6 月の中央教育審議会第二次答申『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について』（以下、中教審第二次答申）においては、「子どもたちが、自然に高齢者と触れ合う中で、高齢者に対する感謝と尊敬の気持ちや思いやりの心をはぐくんだり、高齢者のかかえる問題や『老い』ということ、さらには『死』ということの重さを、身近な問題として学ぶことができにくい状況となっている」ことが指摘された。

同答申においては、「長年培ってきた豊かな経験と知識を有する元気な高齢者が、子どもたちの教育という営みに積極的に参加していくことは、子どもたちが高齢者から様々な生きた知

識や人間の生き方を学んでいくことを可能とするものであり、今後ますます重要」であり、「子どもたちが『高齢者のために何かをして役に立つ』という気持ちを持つことにとどまらず、『高齢者から自分たち自身が学んでいる』という気持ちを自然に培っていくことが重要である」とされている。

大綱では、“高齢者が子どもたちと交流する”という文脈であるのに対し、中教審第二次答申では“子どもが高齢者から学ぶ”という方向性でも論じられている。政府・行政機関のそれぞれの立ち位置によって交流する主体の表現は異なるが、どちらも高齢者と子どもとの間で行われる交流を重要視している。

### 3 世代間交流活動としての里孫活動と FGP

現在、小学校の「総合的な学習の時間」の一環として、小学生が近隣の高齢者施設を訪問して演劇や合唱を披露したり、小学校が高齢者施設の入所者を運動会に招待したりする等の活動が各地で行われている。

このような世代間交流活動の一つに、「里孫活動」「里孫制度」「里まごクラブ」等のように“サトマゴ”という言葉を使って行われている活動がある。実施主体は小学校・特別養護老人ホーム・社会福祉協議会・ボランティア組織等で、1960年代の終わり頃には実施されていた記録がある。本稿ではこれらを総括して“里孫活動”と呼ぶこととする。

里孫活動は、お互いに血縁関係にない高齢者と子どもとが擬制的な祖父母・孫関係を結び交流を深める互恵的なボランティア活動である。一般にはほとんど知られていないため、社会的な認知が得られているとはいえない。通常の世代間交流活動と異なるのは、原則として高齢者1人と子ども1人が対になり、ある程度の期間を継続して交流する点である。これまでに全国で19事例が確認され、そのうち、特別養護老人ホームの入所者と小学生とによる活動3事例を含む数例が、現在でも活動が続けている。

ところで、このような活動がおこなわれているのは、わが国だけではない。米国では、フォスター・グランドペアレント・プログラム（Foster Grandparent Program）（以下、FGP）という高齢者によるボランティア活動が、全国的に行われている。FGPは、1964年に成立した経済機会法（The Economic Opportunity Act）に基づいて1965年より開始された、低所得層の高齢者が特別または例外的なニーズを有する子どもを1対1で支援するという活動である。2009年のエドワード・M. ケネディ・サーブ・アメリカ法（Edward M. Kennedy Serve America Act）により支援対象等がさらに拡大され、現在に至っている。

## II 目的

本研究の目的は、里孫活動に関する研究の一環として、米国におけるFGPの概要を整理し、わが国の里孫活動と比較検討することにより、両者の相違点・類似点を明らかにすることである。

これまで、里孫活動とFGPとの関連や比較については論じられることがなかった。これは、わが国において里孫活動の取り組みがほとんど知られていなかったことと、FGPについての学

術報告も少なかったからであると考えられる。

本研究では、わが国での事例紹介が少ない米国の FGP の詳細を把握し、いくつかの項目に分けて整理を試みた。

### Ⅲ 研究方法

“Foster Grandparent”をキーワードとして Web 検索を行い、上位 10 位までの米国公的機関・非営利組織等の資料を調査した。具体的には次の 10 件である。

- ・ Corporation for National and Community Service (CNCS)：国家および地域社会サービス社（連邦政府により設置された特殊法人）
- ・ State of Texas：テキサス州政府
- ・ Minnesota Senior Corps：ミネソタ州シニアコープ
- ・ New York City Department for the Aging (DFTA)：ニューヨーク市高齢担当部局
- ・ Action for Boston Community Development：ボストン市所在の非営利組織
- ・ City of Hampton ハンプトン市（バージニア州）
- ・ City of Raleigh：ローリー市（ノースカロライナ州）
- ・ Miami-Dade County：マイアミ－デイド郡
- ・ Wisconsin Department of Health Service：ウィスコンシン州保健局
- ・ Pepperdine University Graduate school of Education and Psychology：ペパーダイン大学大学院教育・心理学研究科

調査期間は 2017 年 10 月 8 日～2017 年 10 月 10 日であり、この間に各機関の公式ホームページを適宜閲覧して FGP の状況を整理した。

その結果を、先行研究<sup>1)</sup>により明らかにされているわが国の里孫活動の 19 事例と比較し、相違点と類似点とを検討した。

### Ⅳ 結果

#### 1 里孫活動と FGP との相違点

##### (1) 始められた経緯

里孫活動がわが国で初めて行われたのは 1969 年である。東京都内の特別養護老人ホームにおいて、生活指導員の呼掛けにより「里孫」たちが月 1 回の頻度で活動していた記録が残されている。その後、1978 年に富山県と長崎県でそれぞれ 1 事例ずつの活動が確認されている。これら 3 事例のうち、現在も継続して行われているのは富山県の活動事例のみである。東京都と長崎県との 2 事例が活動を中止した時期は、どちらも記録が残っていないため不明であるが、2010 年の時点では 2 事例とも既に活動していないことを確認している。

これらの 3 事例については、すべてボランティア活動として行われていた。ボランティアの役割を担ったのは「里孫」となった人たちであり、高齢者はボランティア活動を受け入れる側であった。

なお、東京都の事例では、「里孫」となったのは成人であり、小中学生等の児童・生徒ではない。擬制的な孫という立場であるが、高齢者に近い年齢層の“孫”であった。現在の活動事例では、「里孫」はほぼ児童・生徒・学生等であり、中高年である事例は全国の中ではまれである。富山県と長崎県の事例では、前者が高校生、後者は中学生であった。

FGP は、1964 年に当時の米国大統領であったリンドン・ジョンソンが貧困撲滅のために採った "war on poverty"（貧困との戦争）政策の一環として、経済機会局長サージェント・シュライバーにより低所得層の高齢者への雇用対策として考案され、1965 年 8 月 28 日に開始された。このように、始められた時期は明確である。FGP はボランティア活動であるが、当初の経緯から低所得層高齢者の貧困対策・雇用対策の性格を併せ持っている。また、里孫活動が各地域において独自の取り組みとして散発的に始まっているのに対し、FGP は連邦政府の政策に基づいて全米で行われている。

## （２）事業名称と活動を主導している者の関係

里孫活動は、先述のとおり日本各地で散発的に始まっているが、「里孫」「里まご」等、いずれも“孫”を主体とした名称の活動である。現在では、どちらかという里孫となる子どもが主導する活動となっているが、過去の事例では、高齢者が主体的に活動する事例が何件も見受けられる。

たとえば、長崎県での事例では、高齢者の自宅に里孫となった子どもが一晩泊まり込むという「一日里孫」という活動が行われていた。この事例は、“里孫”と買い物に出かけたり、家事を一緒に行ったり、その地域の昔の様子を話して教えたり等、高齢者が活動を主導していた。

このように、これまでに行われてきたすべての事例を見ると、里孫活動は「里孫」である子どもが必ずしも活動を主導するとは限らず、事業名称も含めて多様であるといえる。

これに対して、FGP は全国一律の制度である。日本語に翻訳すると「養育祖父母プログラム」あるいは「里祖父母プログラム」であり、事業名称も実際の活動を主導するのも高齢者である。高齢者が子どもをケアすることで、高齢者に自己効用感や役割意識が生まれるにしても、子どもが高齢者をケアするという活動でない。

また、里孫活動はそれぞれの事例によって「…制度」「…クラブ」等、その事業名が異なる。それぞれの里孫活動には、個別的であること等の共通する部分があるが、理念や目的が必ずしも一致しているわけではない。これに対して、FGP の場合は名称だけでなく理念・目的が全米で一律であり、原則として、州や市によって独自の制度に変更されたり、異なる事業名が付けられているような事例は見当たらない。

## （３）実施主体

里孫活動の実施主体は、高齢者が入所している特別養護老人ホームであったり、子どもが通っている小学校であったり、あるいは高齢者と子どもとの世代間交流をコーディネートする社会福祉協議会であったりとさまざまである。大きく分類すると、実施主体は「高齢者福祉施設」「学校」「社会福祉協議会」「ボランティア団体・その他」の４つの類型に分けられる。実施年数の長い事例では、主体と客体との関係が変化したり、どちらともつかなくなったような事例も存在する。

一方、FGP は国家のサービスプログラムであり、米国の連邦政府が設立した機関である「国家および地域社会サービス社」(CNCS) が管理し、その承認を受けた州政府や NPO 等が運営している。フォスター・グランドペアレントとなる高齢者の要件や活動内容は詳細に規定・管理され、全国一律のプログラムとなっている。ただし、これは地域の独自性がないということではない。

#### **(4) 活動の目的**

里孫活動の目的は、実施主体によって異なる。高齢者の役割創出、健康増進、精神的な安定をはかる等、また、子どもの対人能力の向上、年配者を労り尊敬する心を醸成する等、さまざまである。近年では、高齢者と子どもとの交流経験が少なくなっていることから、交流自体が目的となっている事例もある。

FGP の目的は、「高齢のボランティアに、困っている子どもたちの生活にプラスの影響を与える機会を提供すること」とされている。

#### **(5) ボランティア活動としての性質**

里孫活動は、高齢者と子どものどちらに対しても賃金や利用料等が発生しない無償のボランティア活動である。これまでに判明しているどの事例においても、その点は共通している。高齢者が子どもに遊びや勉強を教えることがあるが、教えられる子どもが料金を支払ったり、主催した団体が高齢者に給与を支払ったりするということはない。子どもに対しても同様である。ただし、事業として里孫活動を行う機関・団体等に、財政的な負担が生じないというわけではない。

FGP は、ステイペンド (stipend) という 1 時間ごとの奨励金が給付される有償のボランティア活動である。FGP は、高齢者に社会参加と社会貢献の機会を提供するボランティア・プログラムであるが、その経緯から低所得層の高齢者に対する雇用対策・救貧対策という側面が強い。ステイペンドは 1 時間当たり 3 ドルを超えてはならないという規程があり、労働の対価として給与が支払われるのではない。そのため、ステイペンドは課税対象外である。給与ではないため、全米の最低賃金 7.25 ドル (2017 年 1 月 1 日現在) を大幅に下回っており、実際の金額は 2017 年では 1 時間当たり 2.65 ドルである。年間の活動時間は 2088 時間未満に制限されており、規定時間数の最大限の活動を行った場合は、1 年間で約 5533 ドルの収入となる。

また、フォスター・グランドペアレントとなる高齢者には、活動にかかわる交通費が実費支給され、昼食についても支給される場合がある。

#### **(6) 高齢者と子どものそれぞれの要件**

里孫活動は、事例ごとに対象となる高齢者・子どもの要件が異なる。たとえば、1969 年に行われていた東京都の事例では、高齢者はその実施主体である特別養護老人ホームの入所者である以外に特段の要件はない。敢えていえば、当時措置制度であった特別養護老人ホームの入所要件を満たし、実際に入所している高齢者である。この事例では、里孫となった人たちは成人であり、中年期以降の年齢層が中心であった。つまり、高齢者にとっての擬制的な孫ではあるが、いわゆる児童・青少年等の“子ども”ではない。

現在も継続して活動が行われている他の事例では、小学校 3 年生から 20 歳前後の専門学校生・



大学生等が主となっている。小学校が主体的に関わっている里孫活動では、「総合的な学習の時間」を利用して定期的な活動を行っており、その場合は当然ながらその小学校に在籍していることと、対象の学年であることが要件である。

このようにわが国の里孫活動では、実施主体によってさまざまであり、要件が明確なものから柔軟なものまで多様である。

これに対して FPG は、高齢者と子どもの要件が全国で一律に定められている。

まず、フォスター・グランドペアレントとなる高齢者にも厳密な適格要件がある。2009 年 4 月のサーブ・アメリカ法施行以降に要件は拡大され、2017 年では、1 人世帯の場合は年収 24,120 ドル以下、夫婦の場合は 32,480 ドル以下と規定されている（アラスカ州とハワイ州を除く）。年齢は、かつての要件は 60 歳以上であったが、現在は 55 歳以上となっている。

さらに、週 15 時間から 40 時間、年に少なくとも 9 ヶ月間活動し、年間 2088 時間未満であること、可能な限り最低 2 人の児童を定期的に担当すること、健康であること、犯罪歴がないこと等の要件がある。そのため、フォスター・グランドペアレントとして活動したいという意向があったとしても、すべての高齢者が参加することができる活動ではない。活動時間数についての要件があることから、むしろ参加へのハードルは高いといえる。

また、フォスター・グランドペアレントの訪問を受ける子どもについても、「特別または例外的なニーズを有するか、または学問的、社会的、経済的發展を制限する条件または状況にある子ども」で、原則として 21 歳未満でなければならないとされている。

## 2 里孫活動と FGP との類似点

これまで、里孫活動と FGP との異なる点を述べてきたが、両者には非常に重要な共通する点がある。

まず一つは、どちらもそれぞれ異世代の者同志が交流することで、何らかの個人的あるいは社会的な課題の解決を志向しているという点である。その事業・プログラムの名称も「里孫」「フォスター・グランドペアレント」のように一世代を間に挟んでおり、親と子のような隣り合わせの世代によるものではない。高齢者と孫のどちらを主体と考えるかの違いはあるものの、一世代を飛び越えてつながるという発想は共通しているといえる。

二つ目は、一対一の個別的な関係を重視している点である。わが国で行われている一般的な世代間交流活動の事例には、集団と集団との活動が多く見受けられる。たとえば、老人ホームに小学生たちが学年単位・クラス単位で出向き、入所している高齢者たちに合唱や楽器演奏を披露したり、老人ホームの入所者たちが小学校の運動会に招待されて、不特定多数の小学生たちの競技を見守ったりするというような活動である。このような集団対集団の取り組みは、老人ホームや小学校等の団体・機関同士の交流になるかもしれないが、その成員である個々の高齢者・子どもが、異世代の者と交流しているといえるかは疑問が残る。その点、里孫活動と FGP とはどちらも基本的には特定の個人と個人とが対になって交流する活動であり、より親密な関係を築くことができると考えられる。なお、里孫活動には、高齢者 1 人に対して子どもが 2 人、高齢者 2 人に対して子どもが 4 人という組み合わせの事例も存在する。一見、小集団

同士の交流のようにも見えるが、元来の一対一であった活動が変化したものであり、考え方としてはやはり個人と個人との交流を目指していることに変わりはない。

最後に三つ目は、高齢者と子どもとが擬制的な祖父母・孫関係を結ぶという点である。里孫活動も FGP も、血縁関係にある者同士の交流ではなく、まったくの他人同士がそれぞれ祖父母と孫となる活動である。単に世代間の交流である場合、“祖父母”、“孫”というような意識付けは必ずしも必要ではないと考えられる。実際に、集団と集団との世代間交流において、それぞれの擬制的家族関係の位置をあらかじめ想定するような活動は見当たらない。

## V 考察

里孫活動はわが国で行われてきた取り組みであるが、その存在はほとんど知られてはいない。全国の9都道県に事例が散在しているが、それらは一部を除いては相互に関連がなく、独自の経過をたどっている。ある事例は40年近く続いており、またある事例は20年近くの活動実績があったにも関わらず中止された。新たに活動が立ち上がることもほばない状態である。これまでの調査では、「コーディネーターとなる担当者の退職や異動によりその後継者がいない」、「後継者となった者に創始者のような熱意がない」等が、継続できない理由として挙げられている。

一方の FGP は、米国においては、全土にわたって50年以上も継続されており、米国の国民にはよく知られたプログラムである。しかしながら、これまでわが国では、FGP の実践・研究についてはほとんど報告されていない。つまり、里孫活動と FGP とはどちらも、わが国ではあまり知られていない活動であるといえる。

現在、わが国はますます高齢化し、高齢人口・高齢化率とも増加していくことから、今後は高齢者が社会でどのような役割を果たしていくのかがより一層問われることになる。これから高齢者の役割を考える上で、里孫活動と FGP の活動実績は、どちらも非常に重要な示唆を与える取り組みであるといえるだろう。

ところで、近年、特別養護老人ホーム入所者の要介護状態の重度化により、里孫活動に関わる高齢者に、比較的健康ないわゆる元気老人がいなくなってしまった。2015年4月より、特別養護老人ホームには要介護3以上の認定を受けていないと入所できなくなったこともあり、今後はますます要介護度の高い高齢者が増加すると推測される。このような状況が、里孫活動のあり方にも大きな影響を与えている。認知症の高齢者が増え、子どもとのコミュニケーションをとることができない状態の入所者が増加したため、かつてのような関係を築くことができなくなっている。たとえ「里孫」となる子どもがたくさんいたとしても、その「里祖父母」となる高齢者は限られている。どのような交流を想定するかにもよるが、アクティブな活動ばかりでなく、意思疎通ができないことにより精神面の交流も制限される可能性がある。

FGP はこれとは反対に、健康な高齢者によるボランティア活動であるため、そのような危惧はないといえる。ボランティアとして活動に参加できないような身体状況であれば、FGP のフォスター・グランドペアレントになることができないからである。つまり、フォスター・グランドペアレントには、基本的に要介護状態の高齢者はいないのである。



このように考えると、わが国の里孫活動においては、特別養護老人ホームの入所者は徐々に「里祖父母」としての役割も失いつつあり、社会的役割がなくなると思われがちであるが、重度の要介護状態である高齢者も大きな役割を果たしている事例が実際にはある。その役割とは、子どもに「古い」を見せることである。これは元気な高齢者ではむしろ難しい。人がどのように老いていくのかは、高齢者と関わることで初めて実感として知ることができる。つまり、要介護状態にある高齢者との世代間交流には効果がない、とはいえないのであり、このような視点がわが国の今後の世代間交流活動には必要であると考えられる。

さて、わが国では2015年10月に当時の首相により「一億総活躍社会」を目指すことが宣言された。また、2016年7月には当時の厚生労働大臣により「地域共生社会」を推進される旨が示された。「一億総活躍社会」「地域共生社会」を目指すわが国こそ、実は米国のFGPのような取り組みが必要なのではなかろうか。仮に、日本版FGPの実施を考える場合、制度的な整備は当然に必要となるが、それ以上に、まずはボランティア活動に対する人々の考え方の転換を図らなければならない。

具体的には、有償ボランティアも一般的なボランティア活動のひとつの形態であると、多くの国民が認識することである。ボランティア活動を有償で行うことの是非は、わが国においてはいまだに問われることがある。報酬を得ることでボランティアをすることの価値が変わるのか、ということについての論議は尽くされていない。ボランティアは無償であるべきと考えてしまうと、FGPの活動が純粋なボランティア活動には見えないかも知れないし、FGPという制度がわが国の習慣に照らしてみた場合に、必ずしも適切であるとはいえないかも知れない。しかしながら、「一億総活躍社会」という新たな社会システムを探るという意味で、米国の取り組みを参考にすることも必要であろう。報酬の有無でその価値を判断しないというようなボランティア概念の転換も、制度設計と同様に課題であるといえる。

## 参考文献

---

- 1) 永嶋昌樹 (2011) 世代間交流における「里孫」活動・制度の現状に関する調査研究．児童学研究 - 聖徳大学児童学研究所紀要 13, 9-16.
- 2) 東京都東村山市立化成小学校 (2004) わたしの教育実践 (202) 心といのちの教育を推進する福祉教育の実践 -13年間の「里孫制度」を柱として．教育展望 50(7) , 52-60
- 3) 西岡 修 (1995) 地域福祉活動実践シリーズ - 里孫制度と老人ホーム - 小学生と特養ホーム利用者との交流をめぐる．月刊福祉 78(4) , 90-93.
- 4) 長崎県大島町社会福祉協議会 (1983) 「てんとう虫」の里孫運動 (ボランティア活動の現状と展望＜特集＞新しいボランティア・プログラム) . 月刊福祉 66(11) , 45.
- 5) Corporation for National and Community Service (2017) FGP Operations Handbook. Version2017.4. Corporation for National and Community Service.
- 6) Corporation for National and Community Service (CNCS)  
<https://www.nationalservice.gov/programs/senior-corps/senior-corps-programs/fostergrandparents>,

2017.10.8

- 7) TEXAS Health and Human Services  
<https://hhs.texas.gov/about-hhs/community-engagement/foster-grandparent-volunteer-program/about-foster-grandparents>, 2017.10.9
- 8) Minnesota SENIOR CORPS  
<http://www.mnseiniocorps.org/volunteering/how/foster-grandparents.aspx>, 2017.10.9
- 9) NYC Department for the Aging  
<http://www.nyc.gov/html/dfta/html/volunteering/foster.shtml>, 2017.10.8
- 10) Action for Boston Community Development  
<http://bostonabcd.org/foster-grandparents.aspx>, 2017.10.10
- 11) Hampton, VA-Official Website  
<http://www.hampton.gov/2049/Foster-Grandparents>, 2017.10.10
- 12) City of Raleigh  
<https://www.raleighnc.gov/home/content/CommServices/Articles/FosterGrandparentsProgram.html>, 2017.10.9
- 13) Miami-Dade County  
<http://www.miamidade.gov/socialservices/foster-grandparents.asp>, 2017.10.9
- 14) Wisconsin Department of Health Service  
<https://www.dhs.wisconsin.gov/aging/volunteer/grandpnt.htm>, 2017.10.10
- 15) Pepperdine University Graduate school of Education and Psychology  
<https://gsep.pepperdine.edu/foster-grandparent-program/>, 2017.10.10